

## I 資本主義と人種主義——『人種・国民・階級』から 30 年

世話人および報告者：太田悠介（神戸市外国語大学）

報告者および討論者：佐藤嘉幸（筑波大学）

酒井隆史（大阪府立大学・非会員）

2018 年はエティエンヌ・バリバル（1942-）とイマニュエル・ウォーラーステイン（1930-）の共著『人種・国民・階級——曖昧なアイデンティティ』の初版刊行から 30 年の年に当たる。節目の年を迎えるにあたって、本書を読み直そうとする試みが相次いだ。若森章孝、植村邦彦の両氏による『壊れゆく資本主義をどう生きるか——人種・国民・階級 2.0』（2017）に続き、ベルリンでは 3 月にバリバルを交えたシンポジウム「危険な状況——バリバル／ウォーラーステイン『人種・国民・階級』再考」が開催され、また論集が刊行されている（Manuela Bojadžijev and Katrin Klingan, *Balibar/Wallerstein's Race, Nation, Class. Rereading a Dialogue for Our Times*, 2018）。

本セッションは『人種・国民・階級』のこうした世界的な再読の機運をとらえ、「資本主義」と「人種主義」をテーマとして、この著作がもつ現代的な意義をあらためて考察することを目指した。『人種・国民・階級』は 1997 年、2018 年と増補を重ね、また抄訳を含めてこれまで 9 カ国語に翻訳されているが、多くの読者に恵まれた理由のひとつは、冷戦終結前の著作でありながら、今日の状況を予見するかのような視座をもっている点にある。冷戦後、西側の資本主義世界で登場した「歴史の終わり」という幸福なヴィジョンとは裏腹に、社会主義の終焉は同時に民族紛争や人種差別といった分断と排除を伴う共同体の回帰を促した。ひとつになったグローバルな資本主義世界のなかで、分断と排除が再び現れるという現代の状況を先取りしていた点に本書の現代性がある。今日、分断と排除の原因がしばしば人種主義（レイシズム）に求められるとすれば、あらためて資本主義と人種主義の関係を問い直す必要があるのではないだろうか。本セッションはこうした見通しのもと、資本主義と人種主義の関係を主要なテーマに据えた。そして、佐藤嘉幸会員、世話人の太田悠介にくわえて、『人種・国民・階級』の重要性を早くから指摘されてきた酒井隆史氏をお迎えした。

まず、ウォーラーステインとバリバルが 2018 年に『人種・国民・階級』を振り返って語ったインタビュー映画（チャールズ・ヘラー、ロレンツォ・ペッツァーニ監督『交差する視線——『人種・国民・階級』をめぐる 30 年後の対話』44 分）を上映し、同書の内容と今日の両者の関心の所在を確認した。その後、佐藤嘉幸会員、太田、酒井氏が順次報告を行った。

佐藤報告「上部構造の相対的自律か、経済決定論か——『人種・国民・階級』におけるバリバルとウォーラーステイン」は、バリバルとウォーラーステインの分析アプローチの差異について考察した。佐藤氏によれば、ウォーラーステインは中核-周辺理論に基づき、「労働力のエスニック化」というレイシズムの経済学的解釈を展開している。これが先進国の移民を含め「安価な労働力」の形成を可能にする論理である。バリバルはルイ・アルチュセールの遺産を引き継ぎつつ、下部構造にたいする上部構造の相対的自律というテーゼを維持しながら、主として国民国家レヴェルでナショナリズムとレイシズムの相補的関係を分析し、そこからアルチュセールのイデオロギー理論の修正をも提案する。国家のイデオロギー装置＝学校装置は、

資本主義的生産関係、すなわち資本一賃労働関係を諸主体に教え込んでそれを再生産するだけでなく、ネイションあるいは「虚構的エスニシティ」の統一性という、ナショナリズムとレイシズムの基礎を諸主体＝国民に教え込み、それを再生産する。それにたいしてウォーラステインは、彼の世界システム理論、すなわち中核一周辺理論に基づきながら、「労働力のエスニック化」というレイシズムの経済学的＝下部構造的解釈を展開する。そのため、両者の分析アプローチの差異は、上部構造の相対的自律か、それとも下部構造の規定性か、という点にある。しかしながら、両者の視点は互いに補い合うかたちになっており、その結果、本書のナショナリズム、レイシズム分析は、経済主義にも政治主義にも目配りの効いたものとなったと結論づけた。

太田報告「エティエンヌ・バリバルと政治——人種主義の分析から移民社会の共同性へ」は考察の対象をバリバルに絞り、『人種・国民・階級』における人種主義分析とバリバルの政治のヴィジョンの接点を探った。バリバルは人種主義を扱う際に、国家を分析の単位とし、その内部における人種主義とナショナリズムの接合を重視する。注目されるのは、接合に際して、ふたつの方向性を指摘する点である。一方では、人種主義がナショナリズムに対していわば機能的に働き、国家内部のヒエラルキーを安定化する。例えば、19世紀初頭のフランスで労働者階級を「危険な階級」として道徳的に退廃した集団とみなしたケースである。他方では、人種主義がナショナリズムを極端に純化する方向へと働くと、結果として国家を不安定化する場合がある。最悪の場合には、人種主義が国家を破壊するまでにいたることがあり、ナチズムが該当する。旧仏領植民地出身の移民労働者にたいする人種差別が70年代から争点として浮上するなかにあつて、『人種・国民・階級』以降のバリバルは移民労働者の市民権を支持し、フランス人の民衆層と旧仏領植民地出身の民衆層のあいだの共同性を擁護するようになる。こうした政治のヴィジョンは一見したかぎりでは唐突とも思われるが、それは人種主義がナショナリズムを安定化し、また不安定化するという二重の作用を繰り返すという『人種・国民・階級』での人種主義分析の延長線上に位置づけられるのである。

酒井報告「階級なき階級闘争？」ふたたびはバリバルが執筆した『人種・国民・階級』の第10章「階級なき階級闘争？」を手がかりとして、同書の階級および階級闘争の両概念を考察した。酒井氏はバリバルがE. P. トムスンを引用している点に注目し、「階級闘争が階級に先立つ」という視点の重要性を強調する。社会階級がまずあり、それが別の階級と対立し、闘争を始めるのではなく、具体的な係争点をめぐって闘争が始まり、その過程で社会階級が形成されるという視点である。酒井氏はアンジェラ・デイビス、セオドア・W・アレンらの議論を参照しながら、奴隷制の時代のアメリカを取り上げた。プランテーションの所有者と奴隷というふたつの階層の分離に奴隷制は支えられるが、この階層分化を正当化するために白人種という人種概念自体が発明されたという。産業プロレタリアートが成立する以前の時代であるために、資本家階級と労働者階級のあいだの対立という意味での古典的な階級対立とは異なるものの、奴隷制が人種主義を生み、また人種主義が産業革命以前の階級分化と結びついていたことを指摘した。酒井氏はこのような社会階級の実に先立つ階級闘争のあり方を考察し、「階級なき階級闘争？」のテーゼを豊かに敷衍する可能性を指摘した。フランスの分脈で『人種・国民・階級』を考察する佐藤報告、太田報告にたいし、酒井報告からは以上のようにアメリカ

の文脈との接続という観点が示された。

三者による報告ののち、会場を交えて討論を行った。セッションの参加者は 40 人ほどであった。カール・ポランニーが分析した救貧法時代のイギリスを念頭において、経済と貧困層を罰するという人種主義の原初的なつながりについて、また、ヘイト・スピーチをめぐる議論など日本の現状を踏まえて、バリバールによる人種主義分析の応用の可能性についてのコメントがあった。いずれも各報告の内容の核心を捉えたコメントであり、資本主義と人種主義の関係を軸として『人種・国民・階級』を読み直すという本セッションの趣旨を報告者とはまた別の観点から照らし出すものであったと思う。報告が予想を超えて伸びるなどして、質疑応答の時間を必ずしも十分には確保することができなかったが、最後まで議論に耳を傾けてくださった参加者には、あらためてお礼を申し上げたい。また、本セッションで上映したインタビュー映画の字幕翻訳と編集作業では、東京外国語大学の中山智香子会員、長谷川健司、崔址訓の各氏にご尽力いただいた。末尾になるが、この場を借りて心よりの感謝を申し上げる。

(文責：太田)